
魔法少女リリカルなのは 十

あっぱっぱー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 十

【Nコード】

N6220T

【作者名】

あっぱっぱー

【あらすじ】

馬鹿みたいな人生だと笑うのか？

馬鹿な奴だと笑うのか？

心から笑いたいのか？

だったら笑えば良さ。

それでも俺は生きる為に戦う。死ぬなんて御免さ。

これは、自らを犠牲に生きる事を選んだ青年の血と後悔に塗れた人生の物語である。

第一話（前書き）

間違っ
て消し
てしま
った作
品です
。すい
ません
。

第一話

一話

第

休日の午後。週末だからか、それとも唯単にリサイクルショップが人気なだけなのか。この店では週末に店や他の様々な主婦と連携して近くの公園でバーゲンをやる。中々掘り出し物が多いのでその情報を知っている人間は週末、必ずこのバーゲンを見に来る、らしい。

俺だってこの情報は先日、友人宅で確証も無く聞いた話だ。今日は特にやる事も無いし、バーゲンの情報の真偽に興味があった。だから足を運んでみたのだが、予想外に人が多い。

ブルーシートの上に広げられた品物は多種多様で、一昔前にテレビのCMで流れていた玩具だったり、華やかな柄の皿が在ったり。本当に様々なモノが置いてある。

人込みを避けながら奥へと進んでいくと、一人の麦藁帽子を被った老人がアクセサリショップを営んでいた。どうやら老人手作りらしい。紅い宝石・・・恐らくはプラスチックのレプリカだろうが、その宝石を十字架の中心にはめ込んでいるネックレス。品物は多くは無いが、それでもそのクオリティには目を見張る物がある。

しかし俺の目には一つのネックレスを捉えていた。親指の爪ほどの大きさの青く丸い宝石。その宝石の周りにはオレンジの宝石、赤い宝石が後から付けた様に飾られている。

「……それは千円じゃよ」

「安い……。そんなに安くて大丈夫か？」

「大丈夫じゃ。問題ない」

「まさか返してくるとはな」

他の宝石はどれも五千円オーバーだというのにこのネックレスは五分の一。外見はアレだが、不思議とこれには何か縁を感じる。

「それ、買うよ」

「壊れたらワシの所へ持って来い。半分の値で直してやろう」

「壊れる事なんて無いだろう？ ネックレスだ」

俺の言葉に老人は癖のある笑い方で笑う。

「使い方によっては、壊れるのじゃ」

「……含みのある言い方だな。俺がコレを使って首でも締める
と？」

「有り得るな」

「嫌な爺だ」

ジーパンのポケットに突っ込んでいた財布から千円札を一枚引っ

張り出し、持っていけとばかりに年代物のブルーシートに叩きつける。差し出されたネックスレスを奪う様に受取った。

——キイイイイン……

その瞬間、視界が揺れる。同時に耳鳴り。グニヤリグニヤリと世界が揺れ始め、それに耐え切れず細かい砂が散らばる地面に膝を付いてしまう。脳みそ掻き回されてるみたいだ……。気持ち悪い……。

そんな俺を見て面白いのか爺はまた笑い始めた。なにこいつ普通に腹立つ。

「——ふむ。適合者だったの……。青年、お前はやがて来る自分の運命を受け入れる必要がある」

「——なんだって？」

この爺はいい年して未だに厨二病に掛かっているみたいだ。可哀想に。

「目が覚めたら始まる」と聞こえた次の瞬間、「どういう意味だ」と問う時間も無く、俺の意識はまるでテレビの電源を切った様にブツリと切れた。

「起きてよーっ!」

目蓋を通して視覚神経を刺激してくる太陽光が憎い。それよりも問題はある。聞き覚えのある幼い声。確か近くの喫茶店の小さなウェイトレスだった様な気がしなくも無い。余程俺の事を起したいのかゆさゆさと揺らしてくる。

どうでもいいが眠いんだ。勘弁してくれ。起きるのを拒否する為に寝返りを打とうとし――

「あ、そっちは――」

ゴシャツと我ながら良い音がしたと思う。鼻っ面を鈍痛が遅い、口には砂利が土足で侵入してくる。目を開けてみれば小石が並ぶ地面が見えた。口の中の砂利を追い出す為に唾を吐いた。

立ち上がって見渡してみるとそこに在ったのは公園にある四角形の大型ベンチ。どうやらそこに俺は寝ていたらしい。落ちるのが納得できる。

今度はズボンを引っ張っている存在へと目を向ける。

頭頂部に近い部分で結んでいる小さなツインテールにピンクのりボン。クリッとしている可愛らしい目の上には眉間に向って下がっている眉。怒ってなければパーフェクト。将来有望な可憐少女の出来上がりだ。

怒ってなければの話だが。

「今日はお店手伝ってくれるって」

「あー・・・月から土曜日まで、学校帰りに四時間勤務をこなしているだろう？」

「立派な従業員じゃあないか」と手を広げてアピールしてみる。

「でも昨日手伝うって」

「聞き間違えじゃないのか？高町妹は最近夢でなにやら聞こえてるらしいし」

その少女、高町なのはそれを待っていた！！といった顔をして徐に持っていた通学鞆から小さな銀色の機械を取り出した。どこかで見た事がある形状。できれば予想が外れてくれると嬉しい。ホントに。

『んー・・・ああ、良いよ。手伝っても』

ガッデムッ！！予想大当たり。ボイスレコーダーでした！

「えへへ・・・。お母さんに言ったらこれ使いなさいって」

「おかしいだろ」

なんで相談したらボイスレコーダー？　なんかこう・・・色々と間違っている気がする。

「じゃあ、手伝ってくれるよね！」

「・・・それはきつと俺の真似をした――」

「じゃあ、手伝ってくれるよね！」

「……分かった、分かりましたよ。皿でも手でもよろこんで洗いますよ」

何故二回同じ事を繰り返したのかは分からないが、それでも高町妹とは付き合いが長い。今の彼女は危険だ。無駄に逆らえば何をされるか分からない。ならば話は簡単。高町家が営んでいる喫茶店の厨房で鬼とも言える高町母の監視の視線を受けながら一心不乱に皿洗いをするしか、助かる道は無い。

「やっぱりお話ししたら分かってもらえるよね」

「恐喝の間違いだろ」



「おかえ———どうしたの？その傷」

「御宅の娘さんの爪は大変鋭利ですね」

高町母事、高町桃子さんへ向けて皮肉を120パーセント込めて言った一言は「褒めても何も出ないわよ？」と返され、終わった。流石は厨房の鬼。サボろうと思考をすればキッチンナイフが頬を掠めて行くだけの事はある。アレは本当に怖かった。

ヒリヒリと痛む頬を痛みを麻痺させる為に引っ搔くと、原因である高町妹に「なんて事しやがる」視線を送り始める。

「・・・可愛い猫さんだったよね」

「ああ、そうだな。猫の癖にツインテールにしてるもんだからお兄さんびっくりだ」

「・・・た、確かにびっくりなの」

「んなわけねーだろ!!」

原因を見る目から逃れたいのかサツと目を逸らした高町妹のこめかみを握る。親指の付け根と中指の付け根に力を入れて――。

「いた、いたたた、いたたたたた!!」

「可愛い可愛い子猫ちゃあああん! 覚悟はできてンですかァ!？」

「あ・・・か、可愛い、かな？」

「・・・まあ、な」

二人の間の時間が止まる――

訳が無い。

「んなわけないだろうが！！！」

「んにゃああああああ！！！」



「あ、お皿追加なの」

「おい、これはお前の菓子のお皿だろ」

「お皿はお皿」

と、高町妹がフォークと一緒に小皿を水の中に漬ける。この餓鬼・
・・・さっきの事を未だに根に持っているな。しかし敢えてそこは
口を出さない。決してケーキカット用の包丁の刃を指で挟み、投擲
可能とばかりに目を光らせている高町母を見たからではない。

「・・・ok、やってやるよ」

黄色いスポンジを握り締め、憎たらしい笑顔を浮かべている高町
妹に告げる。皿洗いを始めて一時間。後一時間働けば休憩できる。
その隙に――

「――逃げられたら、いいなあ・・・でしょ」

「ok。高町妹、お前は俺に何を求める？」

「うーん・・・あ！」

何かを思いついた、みたいな顔をした高町妹は懷から一枚の券を取り出した。皿を洗う手を止め、何が書いてあるのかを確かめようと目を凝らすと、俺にとってはかなり衝撃的な一行が書いてあった。

「高町なのはを一日構う券・・・」

乱暴に書き殴って書かれている一行。筆跡は何処かで見た事があった。俺自身の字だ。・・・そういえば一週間位前に構え構えと五月蠅い高町妹を制する為にポケットに入っていた期限切れのクーポン券の裏に書いた、様な気が。

端っこの方にはちゃんと期限が書いてあった。丁度今日から有効だ。

「ずっと待ってたんだ」

「・・・おっと手が――」

「滑ったら手に持ったお皿が割れちゃうよ」

「ついでに俺の命もな」

――ビィィン・・・と壁に突き刺さっている包丁を抜き取って水に入れる。毎度毎度素晴らしい命中精度だ。そこに憧れもしないし、痺れもしないがな。敢えて言うならば恐怖を抱く。

仕事の鬼とはよく言ったものだ。下手に高町妹と喋れば高町母がダーツよろしく包丁を投擲する。まあ、結果的に言えばどんなに抗ったとしても

「分かった、分かったから俺に話し掛けるな。明日学校帰りに翠屋寄るから」

「ダメなの。来週の土曜日に来てね」

こうなるのだ。

やっと、やっと仕事が終わった。無駄に高い動体視力のおかげで向ってくる包丁やフォークを回避し、何とか今日の勤務（休日）も乗り越えられた。ありがとう親父。今は感謝してる。

エプロンを脱いで元の服装、ワイシャツとラフなズボンに着替え終わり、財布をズボンのポケットに携帯を胸ポケットに突っ込んで、最後は今日購入したネックレスを頭を潜らせて首に掛ける。

ワイシャツとは壊滅的にまで合わないネックレスだが、何となくだが着けておかなければいけない気がするのだ。理由は分からん。でもその行動がマイナスになる訳でもない。だから着けている。

「着けないネックレスはただのチェーンが付いた宝石である」

チャリツと宝石に付いている銀色のチェーンが擦れて音が鳴る。何処かで見た事があるんだが……靄が掛かって思い出せない。

まあ、良いか。別に思い出さなきゃ死ぬなんて事は無いし。

しかし、あの爺の言葉が気になる。唯の厨二病患者だった、と言えばそれで終るが……どうもあの目は本気だった。自分の運命を受け入れる必要がある、か。勇者にでもなって魔王を退治に行けっつか？ もしそうだったら笑えない。

どこにでもいる平凡な高校生だ、特殊能力なんて無いし、せいぜい親父譲りの動体視力が高いくらいだ。アレのせいで俺の青春は他の部活動の助っ人で終わってしまうのが目に見えているが。というか現在進行形で毎日放課後に助っ人を押し付けられる。一回千円。

「……気にしたら負けってこの事か」

気にしたって仕方ない。俺は指で摘んでいたネックレスのチェーンを離す。急いで帰らねば家にいる母親が何をやるか分からない。既に時刻は四時を過ぎている。この時期は日が沈むのが早すぎる。急がねば。



俺はこの先の人生で近道をした事を永く後悔していくだろう。なにせ、普通で在りたいと願っているのに自ら普通から外れようとしているのだから。正確には外れなければいけない、と言った所か。

夜の森を疾駆する。時々後ろ見て飛んでくる黒い液体を回避し、気を避けて走り続ける。確か数分くらい前から走っている気がする。いい加減に出口が見えても良い筈だ。クソツタレ。

「勘弁してくれ・・・ッ!!」

頭を振っても先に広がる闇の空間は拭われない。夢落ちかと頬を叩いてみたがこれも効果なし。ならばと逃げ続けているが、これも―――終了だ。

目の前に広がるコンクリートの壁。老朽具合から廃墟か。右に逃げようとしてみるが分裂した黒い物体が気味悪く揺れながら道を塞ぐ。ならばと左を向くが右と同じだった。正面には人二人分ほどの大きさの黒い物体。

だから嫌だったんだ、近道ってのは。コンクリートの冷たさが背中に染みる。夢なら覚めてくれと頭を掻き毟ってみるが痛いだけ。

物体が蠢く音が段々と大きくなっていく。分かる。俺は死ぬ。こんな所で。訳も分からない連中に襲われ、抵抗する事も出来ずに死ぬ。

そんなこと、

―――納得できるか・・・ッ!!

『ッハッハア!! 良い殺気だア!! 死にたくないよマミー・・・と聞こえて来る様だぜ!』

宝石が喋るか? と聞かれれば今の俺―――榊原静夜はこう答え

る。「有り得なくは無い」と。

第一話（後書き）

更新不定期

第二話

第二話

『俺様の名前はレイド。複合デバイス管制のレイド様だ』

「どうでもいいからさっさとこの状況を打破してくれないか？」

『ok シャイボーイ。俺もお前もやること一つ。剣握って銃握ってぶった切ってぶっ放すだけよ』

首から提げているネックレスの青い宝石がチカチカと光って陽気に話し掛けてくる。静夜は小さく舌打ちするとネックレスのチェーンを引き千切った。『ちょ、おま！何格好良さ気に引き千切ってんだ！マイボディーを！！』なんて聞こえたが無視する。

コイツは確かに言った。『剣握って銃握ってぶった切ってぶっ放すだけ』と。ならばコイツは何らかの武器の筈だ。そう静夜は考えたのだ。

「力を貸せ、レイド」

『ok ok・・・頼むからその握力で握らないでくれないか？ フレームがギシギシ言ってるんだが』

早くしてくれないとフレームを握り潰してしまいそうだよ。と静夜はニヤリと笑う。このわけの分からない宝石がどんな力を持っているのかは知らないが、宝石が喋って、自分と会話しているのだ。

何が来ても今ならば大して驚かない。

ようやく覚悟を決めたのかレイドは『分かった、分かりました！』と投げやりに答えると光りを放った。

辺りを包んだ光に静夜は思わず目を瞑るが、その光りは直ぐに収まる。ふと、自分の体に違和感を覚えた静夜は何かを握っている両手に目を下ろした。

目に入ってきたのはゴツイ拳銃。警察官が使っている様な物ではなく、ヤクザとかマフィアが使っていそうな——確か自動拳銃と呼ばれているものだった。右手に握っているのは銀色のフレームの銃。左手には黒いフレームの銃。

拳銃を持っている事には特に驚かなかったが、驚いたのは自分の服装だ。黒い革のコートに彼方此方に巻き付けられたベルト。両手の甲に装着されている先程まで見ていた青い宝石。

啞然としている静夜の耳に入ってきたのはレイドの愉快的な声だった。静夜にとっては不愉快過ぎる声だが。

『よう、改めて自己紹介だなァ、相棒。この状態の俺様の名前はマスタング&サリー。気軽に大佐、と呼んでくれ』

「雨の日は無能なんだろう？」

『冗談。俺様の瞬間火力を舐めない方が良いぜ？　どんな奴でも蜂

の巢に、素敵な素敵な鉛玉をプレゼント！してやりたい所だが生憎と魔力弾しか出ねエのが現状さ』

それを聞き終わった静夜は両手を左右に広げた。同時にトリガー。ドウンッ！と重なった重い音と共に腕と肩が跳ね上がり、何かが潰れる音が聞こえる。『ヘッドショットで地獄行き、ッハッハァ！』と心底楽しそうな宝石^{レイド}が光り、二挺だった拳銃が消えて月の光りを浴びて黒光りしているショットガンが姿を現す。

右手で払う様に掴み取ったショットガンの引き金に指を当てる。

『ティロ・ファイナーレ！！てかアッ！？』

「どうでもいいよ」

トリガー。飛び出したのは幾つもの鉛玉、散弾では無く、物体を飲み込む灰色の極光だった。

握っていた武器が灰色の蝶となって消えていく。最後には黒い革のコートも灰色の粒子となって消えていく。終ったと安堵した静夜を襲ったのはズキンズキンという激痛だった。まるで体に走ってい

る神経が暴れ、千切れていく感じ。体感した事の無い痛み、体感する筈の無い痛みに静夜はレイドを問いただした。どういう事だ、と。

『あぁん？ おお、言つとくの忘れてたが俺っちは特殊なデバイスでねエ・・・使用すればあら素敵。ちょーつえー力手に入れて

激痛がその身を蝕むって代物よ』

「激、痛・・・」

『そおんの通り！ 現にお前さんを襲ってるだろう？ イタイイタイと叫びてーだろう？』

「黙って、ろ・・・」

レイドの言う通りだった。体を蝕む様にジリジリと焼かれていく。時間と共に増していく痛みで静夜は目を閉じた。最後までレイドの薄汚い笑い声を聞きながら、絶対にコイツは許さないと呟いて。



目を開けてみると映ったのは見慣れた太陽の光りを受けた自室の白い天井だった。やはり夢だったか。アレが現実リアルだったらどうしようかと思っていた。静夜は起き上がり、ベッドの直ぐ横にある窓のカーテンを開けた。しかし窓には先客がいた。

黒く長い髪にパツチリとしたオレンジ色の目。大きな水色リボン

が付いたカチューシャ。これまたオレンジ色の小さな宝石を白いワンピースの胸のリボンに付けた少女は可愛らしく首を傾げると

「ですの」

「・・・」

閉める。

ベッドから降りた静夜はハンガーに掛けてあったワイシャツを手取る。有り得ないのだ、そう、有り得ない。

「妖精？ ツハ！ 帰りに眼科へ行くか・・・」

「サリーですの」

「オイ・・・いいか？ 俺は普通の、何処にでもいる高校生だ。妖精とも、デバイスなんちゃらとも縁が無いんだ！」

勘弁してくれとばかりに静夜は手に持ったワイシャツでふよふよと楽しそうに浮いている自称サリーを払う。嘲笑うようにヒョイツと軽やかに避けるサリーを静夜は睨みつけた。

空中から洋画なんかでよく見る小さなティーカップを取り出した妖精は浮きながら優雅にカップを傾ける。

『んあ？ おう、相棒。調子はどうよ？ 生きてつか？ 痛みで全部忘れました、なんて止めてくれよ？』

「――レイド」

『そおんの通り！ みんな大好きレイドサマよう！！ どしたよ、まるでどっかの妖精を見た顔してんぜ？』

「ああ、そうだな。 見たよ。 妖精」

『オイオイオイオイ！ どうしちゃった、相棒？ その歳で幻覚みてんのかア？ それともただの妄想かア？ どっちにしても人間として終わってらあなア！！ あひゃひゃひゃひゃ！！』

黙ってろ、と静夜は小さく呟いた。レイドの気味の悪い笑い声をBGMに着ていた半袖のシャツを脱いでワイシャツに腕を通す。と、ここでまたもや違和感を覚えた。帰ってきた時に物置として使っているテーブルの上。その上に黒い手袋が乗っかっていた。

自分に見覚えが無い手袋。片手でワイシャツのボタンを閉めながらも片方の手を手袋に伸ばす。

『およ？ どうした？』

「レイド、アレはなんだ？」

『アレエ？ ああ、アイツはサリーだ』

「違う。アレは、”なんだ？”」

『相棒、マイ・フレイムがメキメキ言ってる。 デバイスはデリケートなんだぜ？ 天使のように繊細に、悪魔のように大胆に取り扱って欲しいね』

「だったら大胆にゴミ箱へGO、だ」

『冗談冗談。アレはデバイス、マスタング&サリーの管制だぜ』

手袋に付けられた青い宝石はチカチカと光る。その手袋片手に部屋隅の隅に設置されているゴミ箱に向おうとしていた静夜は軽い調子で喋る無機物に疑問をぶつけた。

「どういう事だ？ あの時はお前が管制だって」

『あたりめえだろう？ 俺はあくまでも総合管制。武装展開すりゃ嫌でも形状変化、メインコアチェンジすっからなァ……』

ま、あの方は単にソイツが寝てただけだ』

「……で、なんで紅茶飲んでんだ？ しかも何で”妖精サイズ”なんだよ!!」

「失礼ですわ。わたくしはサリー、という麗しい名前があるというのに……」

『麗しい？ ツハ！ 冗談はテメーの胸の無さだけにしときやがれ!!』

「なんですって？ あなたの気味の悪い笑い声とわたくしの天使の歌声もびっくりな笑い声。マスターが取るのは一目瞭然ですわ」

『そーだなァ、どうみても俺様だな』

一生やってろ、と静夜は手袋を掛け布団が捲れたベッドに放る。

『天使の様にを忘れるなアッ!!』と叫んだレイドを無視し、「では朝食と参りましょう」と寄ってきたサリーを蠅の様に叩き落とすと部屋のドアを開けて廊下へと出た。

木の木目が見える廊下を歩いて螺旋状の階段を降りる。階段を降り切った静夜は正面のドアのノブを握って手前に引いた。

朝日が差し込むリビング。一つだけ置かれた二人用のソファに對面に設置されたテーブル。

”普通の”家庭ならば此处に父親や母親がいるのだろう。しかし、自分の母親と父親は既に死んでいる。

『運が悪かった』と言えどそれだけだ。現に親族の人達は慰めようとそればかり言ってきた。

トラックの運転手の居眠り運転。徹夜で色んな物を運んでいたのだ、それ位は分かっている。制御が無くなったトラックが突っ込んだのは信号挟んで向こう側に停車していた父と母の乗っていた車。

トイレに行っていた自分はその事故に巻き込まれずに済んだ。だが、両親は即死。見るも無残な遺体と成って、遺体を見る事も無く火葬されて骨と成った。

確か――それが切っ掛けだったか。自分が生に執着を持つようになったのは。

『生きたい、死にたくない』

両親の死を直ぐ傍で見た自分は二ヶ月程ただ、ただ体を鍛えてい

た。

数年も経てば精神が成長して両親の死も今は過去になった。だからこそ、今はこうして普通の高校生活を送れているのだが……。

インスタントコーヒーを注いだマグカップを左手に、焼いていない食パンを数枚右手に持った静夜はソファに座ると食パンを昨日の朝下げ忘れていた平たい白い皿に乗せ、慣れた手付きでテレビのリモコンの電源ボタンを押す。

朝の七時前。見慣れた番組テロップが流れ、ニュースキャスターが各地のニュースを読み上げる中静夜はソファのサイドテーブルに置かれていた青い携帯を手にとった。

『ヘロウ!! 最高に気持ちの良い朝って奴だなア! 相棒ウ!』

「……あの妖精もどきはとうした?」

『待機状態に戻ってんよ。アイツは俺様とは違って体を維持するのに魔力消費してっからなア……あんな長い時間いられんのよ』

「……レイド。教えろ、お前は俺に何を望む?」

『——簡単さア! ぶっ殺してぶっ壊して蹂躪して欲しいのさ、連中をなア!!』

「……連中? お前に何か関係有るのか?」

『俺様はデバイス。カミサマとやらが転生者に与えた チート 力って奴だな』

「待て、転生者？　なんだ、それ」

楽しそうに笑った空中に浮いている青い宝石——レイドは宝石を光らせてテーブルに何かを映し出した。

映ったのは少年。小学の高学年と思える少年が見覚えのある、と言うよりも青い宝石、レイドを操っている。見たことの無い形態——正確には一つの大きな大剣を振り回していた。

その少年の対面にいるこれまた小学生と見れる少年と戦っている。

「これは？」

『転生者同士のコロシアイだ。　ま、この戦闘はオレツチの元所持者が殺されて仕舞いだったがなア』

「……お前って実は弱いのか？」

『ッハ！！　それこそ冗談だ。　俺サマは仮にも与えられたチートそのもの。　負けたのは単に使用者がヨワツチイだけだぜ』

『チート？　確かにそうさ！　俺様最強、貴方も最強！　でも元の身体能力はひっくり返らねェ』

『つまり？　元の知力が強化されるウ？　答えはノウ！　恐怖心が消えるウ？　ノウ！』

『あくまでも強くなるのは戦闘系！　その他ア？　んなもん知るか！』

『最後はビビッてスタコラサッサ！ 後ろからドーンッ！』

『グッバイ現世！ ハロー虚無！ お 陀 仏 さ！』

「――で、その転生者とやらをなんで俺が葬る事になるんだ？」

『簡単さア。 連中は高町なのはやらフェイトなんちゃらといちゃいちゃうつふんそこはダメーんな生活がしたいのさ』

「全然簡単じゃないな。 もっと簡潔に話せ」

『まア、つまりィ？ ハーレム築いて幸せ家族を作りたいんだとよ。俺様の元マスターは』

『他の奴等も同じ事言ってたって愚痴ってたからなア・・・ま、同じだろ』

『だが！？ そーんな幸せカス計画カミサマは許さねエ。 幸せ欲しいなら他人ぶっ殺せて命を下したわけよ』

『そこからカオス。 すんごかったぜエ？ 一日に一体何個の反応が消えた事か。 部屋の隅でガクブルしてた元マスターは中々傑作だったなア・・・』

「オイ。 ちょっと待て。 お前の発言から推測するに――一日に何個も反応が消えるほど転生者がいるのか？」

『楽しいパーティーだぜ』

「さて、と……粗大ゴミはいつの日だったか……」

『へい、相棒。笑えないぜ？ そのゴミ袋は……ア——
——ッ！——』

第二話（後書き）

レイドⅡ奇襲の意

第三話

『オイオイ相棒ちゃんよオ、ガッコーとやらサボっちゃっていいのかア？　こら！相棒ちゃん！レイドサマは相棒ちゃんをそんな風に育てた覚えはありませんッ！！　ってかア！？　あひゃひゃひゃひゃッ！！』

「これは？」

『ああん？　スルーですかア？　スルーなんですかア？　寧ろ放置プレイなんですかア！？　良いねエ相棒！中々刺激的じゃねーか！』

時刻は既に昼時。今ごろ高等学校の3階、階段上って一番奥の教室では意気揚揚と皆が昼食の弁当を食べている頃だ。

静夜はどんなメカニズムなのかは知らないが、空中に浮いている透明のウィンドウに一定の速さで流れていく文字を止める。

昨日の戦闘、思い出したくは無いが自分は確かに銃を握りあの物体を撃ち抜き、消し去った。目を瞑れば自分に迫る赤い瞳と影に覆われた体が迫るのを思い出せる。肩の衝撃、トリガーを引いた指の感触。鮮明に思い出せるその”事実”は静夜を悩ませるには充分過ぎた。

ウィンドウに表示されている日本語。それはこう記されていた。

<レイド　奇襲機能使用時の武器交換について>

「お前・・・戦えたのか」

『オーライ相棒。 体育館の裏に来な、ボッコボッコにしてやんよ』

「宝石のお前に何が出来るんだ？」と静夜は鼻で笑う。『バッキヤロウ！！いざとなりやア俺様にはスーパータックてのがあんだよウー！！』と怒りの感情を表しているのかチカチカと光っている青い宝石から視線を外し、再び手元の大きな本に向ける。レイド曰く『教科書』だとか。正直に言えば、読む気なんてこれっぽっちも無い。しかし読まなければならない。

レイド曰く、自分は転生者たちに目を付けられているらしい。

レイドを以前所有していた転生者も自分の事を酷く疑ってたらしいし、自分がこの世界の住人だと知る以前は本気で殺そうと考えていたらしい。だが、ここで一つ疑問点が浮かび上がる。オカシイのだ、色々と。

静夜は薄いページを捲って次を見る。

転生者、とはいえ元は唯の一般人の筈だ。そんな一般人がこうも人をあっさりと殺そうと考えるのだろうか。他の転生者だってそうだろう。反応が消えたと言う事は死んだと同意義。

「力を得ただけでこんなにも変わるモノなのか・・・？」

『人ってーのは変わる時は変わるモンだぜエ？ その手で人斬り殺せば、まア有り得なくは無いんじゃないの？』

「自暴自棄、か」

『んのとーり。もう一人ヤツちましたア！一人も二人も百人も変わらねエ！！全員ぶっ殺して蹂躪して破壊し尽くしてやんよ！　ってなるわけだ』

「吹っ切れてる人間は面倒だから嫌いだよ・・・」

『おやまあその歳で厄介ごとの経験ありたア、凄いなエ！　惚れる！　俺様相棒の魅力に惚れちゃうウ！！』

「さてと・・・情報集めに行くぞ」

『スルーウ！！　これまたスルーウ！！　いいねエ相棒、クールでドライな奴は嫌いじゃねエ、大好物さ！！』

「黙ってろ」

第三話

平日の真昼間。主婦たちは今ごろ晩御飯の準備の為に商店街へと足を運んでいるのだろう。静夜は人気の無い林の中を口煩いレイドの指示で地面を確認しながら歩いていた。曰く、昨晚この辺りで強力な魔力反応があったらしいのだ。もしかしたら、いや、十中八九転生者の仕業と見て良いだろう。

魔力、デバイスなんちゃらや魔法なんて言うファンタジー溢れる奇跡を起こす為に必要不可欠なエネルギー。レイドが言うには自分

には素養は有るらしい。体内に宿している魔力はランク付けされているらしく、転生者は殆どが”S”ランク越え。対する自分は”C”ランクだそうだ。

しかし分らない。何故、こんな場所で魔力を開放したのか。

「何かを試したかった？」

『ま、ありえなくは無いな。だとしたらソイツはかなりの力を持っていると見ても良いんじゃないかねーか？』

「ああ・・・そうだな」

もしも、もしも何かを試したかったという仮説が合っていたとしたらその開放した人物はかなりの力を持っている。

簡単に言えば『思わず試したくなる程の力を実感していた』という事だ。もしかしたら好奇心で使っただけかもしれないが、警戒しておくにこした事は無い。静夜は”挟れた”地面を見ながら自分は今後戻りは出来ないと、実感していた。

まるで隕石が落下してきた如く挟れている地面。その中心には目に見えて薄青い粒子が散乱していた。これが魔力の残りカスみたいな物らしい。魔力光は青だ。

『相棒の魔力光は灰色。しかもランクが低いから魔力密度も低い。対するこっちは魔力密度がクソみたいになりやがる、放出された魔

力がこれだけの密度だとシューター一発の威力が化けモンだな・・・」

「対処法は」

『俺様の奇襲機能を最大効果発揮できれば、勝ち目が無いわけじゃない』

「闇討ち、か・・・」

『おやア？　闇討ちは御嫌いなんですかア？　俺様大好き！！　闇討ち　サイコオオオオツ！！』

「煩いデバイスだ・・・」と静夜は呟いて地面に膝を着き土を一撮み握る。目に見える程の魔力密度。これほどならば土に魔力が染み付いていてもおかしくは無い。相手が誰なのか、年齢、性別その他全てが不明な今出来るのは魔力パターンを解析しそのパターンに合う人物を特定する事だけだ。

「出来るな、レイド？」

『当たり前だぜ相棒ウ、俺様たちは三つで一つ。魔力系に特化してるデバイスコアもちゃーんとセッティングされてらアな』

レイドの言葉に首もとのネックレスに付いている紅の宝石が一瞬消えてしまいそうな光を灯す。すると、隣のオレンジ色の宝石が喧しく光る。そして頭に響いてきた甲高いアニメ声に静夜は思わず頭を押さえた。

『わたくしにも解析くらいできますのっ！　マスター、あの無愛想

デバイスよりも可愛らしいサリーに解析を――』

『テメエは黙って紅茶でも飲んでろ英国人！！』
ブリティッシュ

『なあんですって！？』

『五月蠅いテメエよりは煩くないターナーの方が数百倍マシって
んだッ！！』

腕部装着型魔力放出特化アームデバイスアフターバーナー。レイド曰く、『近接戦闘ならびに魔力放出、制御、生成だけに特化したデバイス』との事。近接戦闘では無類の強さを発揮するらしいが、その姿を静夜は一度たりとも見た事が無かった。あるのは『歩く武器庫』マスタング&サリーのみ。

曰く、『滅茶苦茶ゴツイ』

曰く、『思わず苦笑い』

曰く、『殴った瞬間ビッグバン』等。

『歩く武器庫』とコアのデータベースに表示されていたサリーは文字通り魔力でコーティングされた実弾を放つ。無論、純粋な魔力だけで撃つ事も出来るが――。

『マスターの魔力ランクはC。純粋な魔力のみだと魔力限界到達が
まりよくぎれ
目に見えてますわ』

との事。

だから実弾をコーティングし、障壁貫通能力を付加して撃ち出す。初速も魔力で押し出している為、速い。距離が遠く中に限られてしまうがそれを補う火力が有る。まあ、銃器なんて普通扱う事は無い為狙い、構え方は初心者そのもの。かと言って訓練したいかと聞かれればその答えはNO。自ら地雷溢れる地雷原に足を踏み入れるなど、愚の骨頂。自殺は勘弁願いたいのだ。

しかし訓練しなければ昨晚襲われた時の様に対処出来ず、途方に暮れる事となる。レイドの要望、『他の転生者を殺す』は聞き届ける気は全く無いが自衛程度の力を身に付けておかなければ危険だ。

ギャーギャー言い争っているレイドとサリーを無視していた静夜は首もとのオレンジ色の宝石に

「ターナー、解析頼む」

『yes』

と、静夜が脳内で繰り広げられる猛烈なデバイス同士の言い争いに頭を押さえながらも小声で紅のコアに告げる。一瞬光る事で答えたターナーをポケットに戻した静夜は立ち上がり――

「おい、そこのモブ」

「・・・俺か」

『おやア？ さっそく転生者様のお出ましたなアどうする、相棒？
ぶっ飛ばす？ ぶっ飛ばしちゃう？』

木の陰から出てきた小学四年程と見受けられる少年は十字架の形

をしたネックレスを指で遊びながらゆっくりと此方へ歩いてきた。だが、静夜はネックレスよりも少年の容姿に目が行った。日本語をペラペラと喋るところを見ると、少年は間違いなく日本人だろう。しかし、容姿がオカシイ。日の光に反射して輝く銀髪、蒼い宝石の様な二つの瞳、端整な顔立ち。どこからどう見ても外国人の類だ。

頭に響いたレイドの声と共に十字架のネックレスが青く光る。どうやらこれが転生者の証、デバイス（チート）らしい。と、いう事は見掛け、外見に騙されると痛い目を見ろという事か。

「どうしたんだ、坊主？ 今の時間は学校だろう？ こんな所で何をしてるんだい？」

「今日は開校記念日だよ。んな事はどうでもいい」

（――嘘だな）

ターナーの視覚的補助により、今自分の目には少年の全てのデータが映し出されている。その内の一つ、脈拍が早くなった。瞳孔も少し揺れた。間違いなく嘘を吐いている。これにレイドの発言を合わせれば、確実にこの少年は転生者だろう。しかし、転生者だと分っても何をするかなど決まっていない。話を聞くだけにしても程ほどにしていないと何をされるか、何を聞かれるか分った物じゃないからだ。

戦闘？ いやダメだ。 こっちは銃を握るのも初めてな初心者。魔法と言う概念すら理解できていない今、戦う事は最も愚かな選択肢だ。幸い、自分が転生者であり、高町妹に接触している奴だという認識は外れている筈だ。ならば連中が取る24の選択肢の内で最

も選択する確率が高いモノは——自分を利用する。

そうだ、もしもレイドが言っている事が正しいならば連中はまず高町妹と何らかの関係を持ちたがる筈。それこそ友達、クラスメイト等。もう一人——フェイトとか言う子にも恐らくは。

だからこそ、自分を利用する。

高町なのは、自分にとってはアルバイト先の娘としか認識してないが彼らにとっては違う。何と言うか……一種の狂気を感じる。

会いたい者に会えた、みたいな。そんな感覚だ。

「俺の名前は平賀サイト、モブ、お前を俺の友達にしてやろう」

『あひやひやひやひやっ！！！！こりゃ傑作だアッ！！餓鬼の分際で高校生に友達だってよオ！！あひやひやひやひやっ！！！！歳の差考えろってのッ！？』

『マスター、あの餓鬼を蜂の巣にしましょう。ええ大丈夫。サプレッサーを着ければ発砲音なんて主婦たちが見ている昼ドラの音に消されますわ』

結構殺伐とした事を脳内で言ってくるデバイスを宥めつつ静夜は立ち上がった。

「坊主、俺は高校生、お前は小学生。歳の差考えろよ、ほら入学式で歌ったろう？おっぱい飲んで、ねんねして、さっさと帰れ、ふあつくゆーってな」

「喧嘩売ってんのか？」

「滅相も無い。．．．ん？ ああ、高町妹か．．．今日は帰りが早いんだっけ？」

「なに！？」

凄いい勢いで後ろを振り返った少年に背を向けた静夜は一気に駆け出す。音を立てずに、迅速に。付き合っていないのだ。



「ハッ．．．ハッ．．．ハア．．．何とか逃げ出せたな」

『流石相棒、イかれちまつてる相手は慣れたモンだなア！』

建設中のビルに逃げ込んだ静夜はゆっくりと冷たいコンクリートに腰を下ろした。やはり、連中は高町妹などに過敏に反応する。てんせいしや

隙を作って逃げればこちらのペースだ。幸い、此処のビルは建設員が現在休暇中で作業が止まっている。しかしその事実を知っているのは極僅か。静夜は偶然作業員の話聞いていた為、この事実を知っていた。

「アレが転生者？」

『おうよ。見た目はアレだが中身はおっさんだ。気をつけろよ』

「……詐欺じゃないか」

『転生ってのはそーゆーこった。家族も本当の自分も投げ出して新しいモノを得る。一種の交換みたいなモンなんだぜ?』

やれやれと静夜は溜息を零した。

確かにあの容姿はどう考えてもおかしい。美少年。日本人離れした髪色に瞳。そのくせ日本語ペラペラ。

「アイツと魔力は一致したか？」

『No』

ポケットの中のターナーは簡潔に返事をした。

魔力は一致しなかったが、あの少年の保有魔力量は異常だ。未だ右目に表示されている少年のデータ。大きく映された文字は『SS S+』。

「レイド」

『あァん?』

「俺とアイツが戦ったらどうなる」

『精々遊ばれて終わりだな。良くて掠り傷一つ付けられるくらいだ』

「ヒドイモンだ……」

『それが現実ってモンよオ・・・だから闇討ちしようぜ?』

レイドの言葉に鼻笑いで返した静夜は立ち上がると乱れたシャツの襟を直し、溜息を吐いた。

「俺はまだお前の言葉を信じたわけじゃない。それに、お前に協力するとも言っていない」

『あひゃひゃひゃひゃっ!! 諦めなア相棒ウ!! お前さんは適合者、俺様握った時点で歯車を動き出してんだよウ!!』

『お前さんは覚醒直前なのさア!!』

『”世界を殺せる毒”になア!!』

第三話（後書き）

アフターバーナーⅡ再燃

追記。

お稲荷様のところの主人公さんと名前が被っていたので修正。

緊急告知

はい、どうも。しばらく更新してないあっぱっぱです。

えーっと、ですね。この度の告知はですね、自分の環境の報告です。自分はまだ学生の立場であり、来年の明けには期末のテストがあります。

まあ、そこら辺はまだいいんです。

大事なのですね。教師の方から単位を落とすことになる、と通告されました。

それで落とした科目が四つ・・・くらいですかね。それくらい落としました。

なので今年の取得単位は二桁にも及ばず、この結果はまあ両親に激怒されました。

「パソコンと勉強を両立できないなら、パソコンをするな」と御叱りを受けました。

最近、八月辺りにパソコンがクラッシュしてから小説の方はスランプになり

今まではポイポイ浮かんでいたネタが今ではさっぱりです。

それでも何とかやってみようと考えていたのですが、逆に勉強の方が疎かに。

その結果がこれです。もうホントに申し訳ない。

他の小説も苦し紛れに書いていて、そろそろ本気で余裕がなくなってきました。

なので、大変申し訳ないのですが自分が投稿している小説全てを削除。

ストーリー、キャラ、その他を見直しながら一から書き直していると考えています。

リリカルなのはについては大変申し訳ない。三話しか投稿せず、削除という形になったことをここにお詫びします。

本当に、消すくらいなら最初から書くなと思う方もいるかもしれませんが、御了承下さい。

今回の自分のミスは想定外であり、完全に俺に非があります。

両親には期末のテストでいい結果を取り、来年からは真面目に授業に出席すると言う事で納得してもらってます。

なので申し訳ないです。再び作品を書く為に、より良い物に変えていく為に、未練を断ち切る形で作品を削除します。

すいませんが、御了承下さい。

あ

っばっばー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6220t/>

魔法少女リリカルなのは 十

2011年12月21日18時55分発行